

「先生、この教科を学んで将来何の役に立つんですか」と生徒に問われたとする。「教科」を学ぶ意味とは何なのか。

例えば、「免疫について学べば、自分が病気になったときに役に立つでしょ」と答えたとする。それは医者に聞いた方が早いし正確なのである。

また、「学校」で学ぶ意味とは何だろうか。最近では、「自宅」で「好きな時間」に「より高度な」学びを受けることが容易になりつつある。実際、学校の先生に教科を学ぶより、東京大学の講義動画を聞いている方が、より高度な知識に出合えるのではなかろうか。

教科における知識は、学ぶべき“目的”ではなく、学ぶための“道具”でしかない。学校でしかできない“学び”とは何か。それは「多様な人（生徒や教員など）が一緒に考える時間」があることだろう。

生徒が知識を“使う”ためには、生徒が自由にできる時間が必要である。そこで、50分間の授業時間のうち、より多くを生徒に預けることにする。授業者による知識の伝授に10分、生徒による知識の利用（他者への説明）が35分、生徒が学びを振り返るために5分である。

授業者が行うことは、生徒が到達すべき課題（問い）を提示、課題をクリアするために使えるような知識を提示（説明はしない）、個々の生徒が課題に到達しているかの把握である。この3つしかやることがない。

このような授業を長期間にわたり続けると、最も変化するのは、生徒の「表現力」である。授業者が提示する課題は「他者に説明すること」のため、自分が理解したことを誰かに説明しなければならない。自分の級友に伝わるように説明を続けるうちに、適切な表現の工夫ができるようになる。

また、知識の習得方法も変わる。以前は、ノートに何度も書くことで“覚えるため”の知識だったのが、誰かに説明するために“使う”ことで専門知識を理解するようになる。生徒にアンケートをとると、「テスト前に慌てて勉強することがなくなった。授業中に説明できるまで理解しているから、テスト前はちょこっと確認するだけ」となる。

授業者の話す時間が長いと、生徒から「先生の話す時間が長い。早く自分たちが学ぶ時間にしてほしい」と言われたりする。授業者にとっては寂しいが、生徒にとっては、教科書も授業者も変わらず「学ぶための“道具”」でしかない。まずは教科書などで知識（道具）を得て、その道具がうまく使えるようになかったら、授業者（専門家）に助言をもらう。そうして使えるようになった道具は「学校」でしか会えない生徒同士で“使い合う”。

目の前にいる生徒たちの将来には、想像し得ない社会が待っており、我々教員がアドバイスできることは、かなり少ないと思われる。我々にできることは、大量の知識を与えるのではなく、そのような社会でも自分の判断で知識（道具）を得て、使うことができる力を生徒につけることである。

「先生、この教科を学んで将来何の役に立つんですか」に対して、「教科を学んでも一部の人以上はほとんど役には立たないよ。でも、教科を“使う”ことで学んだものは何にでも活用できるし、役に立つだろうね」と答えたい。